20191013「食卓を中心に置く共同」マルコ８：1-21

「食卓を中心に置く共同」マルコによる福音書８章１－２１

森島　牧人　牧師

今日の聖書マルコ８章の「四千人に食べ物を与える」と、少し前に学んだ同６章の「五千人に食べ物を与える」は似ているところがありますので、一つの出来事が重複して書かれたのではとの疑問も生まれるのですが、マタイによる福音書にも省略されることなく、それぞれの出来事として書き残されていることから、この二つの奇跡が、別々の場所で、別々に起こされたものと分かります。主が、二度も同じような奇跡を起こされたことを通して、私たちは、主イエスの思いが余程のものであったことを、知ることが出来ます。

さて、福音書には食事の記事がよく出て来ますが、主イエスは、いろいろな人と食事を共にすることを喜びとされました。それは、人々が主と共に食卓を囲むことが、主と共に喜び生きることを意味していたからでした。

聖書には、罪人とされる人々の招かれた食卓で、彼らと食事を共にされる主の姿が度々描かれています。復活された後も、弟子たちと食卓を共にされましたし、一緒に座ってパンも裂かれています。これは、人々に復活の確かさを示すと共に、弟子たちを主の復活の証人とするためでもありました。

この、主を中心とした食卓の交わり、それこそが教会のあり方と言えます。教会は難しい教義があって始まったのではなく、「主と共に食卓を囲む共同体」として始まったのです。それは、聖餐として、今に受け継がれています。初代教会で囲まれた食卓には、パンの奇跡を実際に体験した者たちもいて、その主との思い出を語りながらの食卓であったろうと、想像出来ます。

また、この二つの奇跡の場面で特筆すべきことは、弟子たちが、主から渡されたパンと魚を人々に配るというサービス（奉仕）をしていることです。このことから、この二つの奇跡物語は、初代教会での聖餐の度に思い出されることとなりました。弟子たちは、パンを裂いて渡された主イエスの姿など、折に触れて思い出し、語って行ったに違いありません。

そのような弟子たちにとって、同じ思い出でも、四千人の人々の食事の出来事には、喜びの思い出と同時に、非常に苦い思い出でもありました。舟にパンを一つしか持って来なかったことで議論している彼らに対し、主イエスは、「・・・まだ、分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。・・・」（マルコ８：１７－１８）と、厳しい叱責の言葉を重ねて言われたからです。二度の奇跡から、何も得ていない弟子たちの無知・無理解を、嘆かれてのことでした。

群衆を憐み、食事のことを心配される主の思い。「主の憐み」とは、常に、主ご自身の痛みを伴う人間への同情でした。つまり、二度の「パンの奇跡」は、主の憐みの心の働きを原動力として展開されたもので、人間の弱さへの同情があふれ出た結果でした。しかし、その中で弟子たちを働かせようとされた主のみ心を、弟子たちは、理解できなかったのです。

二度の奇跡の場面で主が弟子たちに言われた「あなたたちが彼らに食べ物をあたえなさい」というお言葉は、空腹の群衆に、あなたたちは「何を分けることが出来るか」を、弟子たちに問われるものでした。群衆の空腹への心が鈍かった弟子たちは、神の御業を再度見せていただくこととなったのです。二千年前、群衆の肉体の痛みを憐れみ、同情された主イエスは、今も生きておられて、私たちの弱さを憐れみ、同情を寄せてくださっているのです。